〔ジベレリン液剤〕

住友ジベレリン液剤

農林水産省登録　第２４２６０号
性　　状：淡褐色澄明水溶性液体
毒　　性：普通物
危 険 物：第４類アルコール類　Ⅱ
有効年限：満５年
包　　装：(40㎖×1本)×10×10、(100㎖×1本)×10×10

有効成分：ジベレリン……0.63%

農薬ガイドの適用表内（＊）および各項目については、i-農力サイトの「製品情報」や「農薬ガイドを見る」から、「農薬ガイドの見方」をご参照ください。
本剤の最新情報：こちらの２次元バーコードを読み取ると i-農力サイトに掲載されている本剤の最新情報がご覧になれます。

〔適用と使用法〕

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かんきつ（苗木、ただし、温州みかんを除く）	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	12～３月	１回	立木全面散布又は枝別散布	１回
		☆ ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ			立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	
かんきつ（不知火、ぽんかん、かぼす、はるみ、ワシントンネーブル、日向夏、すだち、平兵衛酢、長門ユズキチ（無核）、温州みかん、きんかん、愛媛果試第 28 号、愛媛果試第 48 号、清見、カラを除く）				収穫後～３月			
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
不知火 はるみ 愛媛果試第 28 号 愛媛果試第 48 号 清見	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	３回以内
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5～１ppm	50～500 ℓ/10ａ	着色終期但し、収穫７日前まで		果実散布	
カラ	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	１回
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5～１ppm	50～500 ℓ/10ａ	着色終期但し、収穫７日前まで		果実散布	

★色掛けは2024年7月24日適用拡大
（☆部分は「かんきつ(苗木、ただし温州みかんを除く)」に適用拡大）

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぽんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月	１回	立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	１回
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	水腐れ軽減	ジベレリン 0.5 ppm	50～500 ℓ/10ａ	着色始期～４分着色期但し、収穫 21 日前まで		果実散布	
長門ユズキチ（無核）	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	着果安定	ジベレリン 50 ppm		開花期～開花終期		花又は果実散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10～25 ppm	50～400 ℓ/10ａ	収穫予定 14～30 日前		果実散布	
すだち	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン ５～25 ppm	50～400 ℓ/10ａ	収穫予定 ７～30 日前		果実散布	
平兵衛酢かぼす	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止		50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10～25 ppm	50～400 ℓ/10ａ	収穫予定 14～30 日前		果実散布	
ワシントンネーブル	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 500 ppm	30～40 ℓ/10ａ	満開 10～20 日後の幼果期		幼果に散布	
日向夏	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	無種子化落果防止	ジベレリン 300～500 ppm	30～40 ℓ/10ａ	満開７～10 日後		果実散布	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん（苗木）	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	11～１月	１回	立木全面散布又は枝別散布	１回
		ジベレリン 10 ppm				立木全面散布又は枝別散布（プロヒドロジャスモン 1000～2000 倍液に加用）	
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ			立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液又は展着剤に加用）	
温州みかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	３回以内
		ジベレリン 10 ppm				立木全面散布又は枝別散布（プロヒドロジャスモン 1000～2000 倍液に加用）	
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	11～１月 但し、収穫後		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液又は展着剤に加用）	
	落果防止	ジベレリン 10 ppm	50～100 ℓ/10ａ	開花始め～満開 10 日後		散布（プロヒドロジャスモン 1000～2000 倍液に加用）	
		ジベレリン 25～50 ppm				散布	
	浮皮軽減	ジベレリン １～５ppm	100～400 ℓ/10ａ	収穫予定日の３カ月前 但し、収穫 45 日前まで		果実散布（プロヒドロジャスモン 1000～2000 倍液に加用）	
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ/10ａ	収穫後～３月		立木全面散布又は枝別散布（マシン油乳剤 60～80 倍液に加用）	１回
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ/10ａ	収穫直後～収穫約１カ月後		立木全面散布又は枝別散布	
	落果防止			開花始め～満開 10 日後		散布	
	着果安定	ジベレリン 300 ppm	30～60 ℓ/10ａ	一番花開花期		花に散布	
かき	落果防止	ジベレリン 12.5～200ppm	30～100 ℓ/10ａ	満開 10 日後		幼果及びへたに散布	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
すもも(貴陽)	着果安定	ジベレリン 100～200 ppm	20～50 ℓ/10ａ	満開 20～30 日後(第１回目) 満開 50～60 日後(第２回目)	２回	果実散布	２回
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25 ppm	100～400 ℓ/10ａ	開花期	1花当り1回	花に散布	1花そう当り3回以内
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50～200 ppm	―	は種前	１回	種子浸漬	１回
みつば(軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10 ppm	50～100 ℓ/10ａ	本葉２～３枚時(第１回目)とその２週間後(第２回目) 但し、収穫 14 日前まで	２回	葉面散布	３回以内(種子への処理は１回以内、は種後は２回以内)
みつば(軟化栽培)		ジベレリン 20～50 ppm		根株伏込時	１回	根株上面に散布	２回以内(種子への処理は１回以内、根株伏込時は１回以内)
ふき		ジベレリン 25 ppm	50～300 ℓ/10ａ	葉数３～４枚時(草丈 10～30 ㎝頃)		全面散布	１回
セルリー	生育促進 肥大促進	ジベレリン 50～100 ppm	20～200 ℓ/10ａ	収穫予定 ７～20 日前		葉面散布	２回以内(種子への処理は１回以内、は種後は１回以内)
うど(春うど)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 50 ppm	１株当り 20～25 ㎖	伏込時		根株散布	１回
		ジベレリン 50～100 ppm	―			根株浸漬	
たらのき(促成栽培)	萌芽促進	ジベレリン 50 ppm	100～200 ㎖/㎡			駒木散布	
さやいんげん(矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	ジベレリン ５ppm	１株当り ２㎖	本葉 0.5～1.5 枚展開時	２回以内	茎頂部散布	３回以内(種子への処理は１回以内、は種後は２回以内)
トマト	空どう果防止	ジベレリン 10 ppm	１花房当り ５㎖	開花時	1花房当り1回	花房散布(トマト落果防止剤と併用)	種子への処理は１回、１花房当り１回
メロン	着果促進	ジベレリン 200 ppm	１花当り ２～５㎖	開花前日～翌日	1花当り1回	散布(4-CPA 剤 50 倍液に加用)	種子への処理は１回、１花当り１回

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
なす	着果数増加	ジベレリン10～50 ppm	100～150ℓ/10ａ	開花時	１回	葉面散布	２回以内（種子への処理は１回以内、は種後は１回以内）
しそ（花穂）	穂の伸長促進花径の伸長促進	ジベレリン５ppm	50ℓ/10ａ	出穂期但し、収穫５日前まで	２回以内	茎葉散布	３回以内（種子への処理は１回以内、は種後は２回以内）
畑わさび	花茎の抽出時期促進及び発生量増加	第１回目ジベレリン100 ppm第２回目ジベレリン100 ppm	１株当り２㎖	花芽分化後の10月下旬（第１回目）及び第１回目処理後約10日後の11月上旬（第２回目）但し、収穫60日前まで	２回	株の中心部に散布	
いちご（促成栽培）	着果数増加熟期促進	ジベレリン10 ppm	１株当り５㎖	休眠に入る直前（冬場の低温期）	１株当り６回以内	茎葉全面散布	１株当り10回以内
いちご	果柄の伸長促進			頂花の出蕾直後～開花直前	１花房当り１回	株の中心部に散布	
いちご（親株床）	ランナー発生促進	ジベレリン50 ppm	１株当り10㎖	採苗時ランナー発生直前～発生初期	１株当り１回	茎葉散布	１株当り１回
ごぼう（促成栽培）	休眠打破による生育促進	ジベレリン10～15 ppm	50～100ℓ/10ａ	休眠に入る直前（残葉２枚程度の頃）及びその約１カ月後但し、収穫30日前まで	２回以内		３回以内（種子への処理は１回以内、は種後は２回以内）
ばれいしょ	休眠打破による萌芽促進及び小粒いもまたは全粒種いもの増収	ジベレリン５～10 ppm	―	植付前	１回	30秒間種いも浸漬	１回
			250～300㎖/種いも10 kg			種いも散布	
シクラメン	開花促進	ジベレリン１～５ppm	１株当り２～５㎖	９月中・下旬		花蕾を含む芽の中心部に散布	
プリムラ（マラコイデス）		ジベレリン10～20 ppm		11月上旬頃の花蕾出現直後		株の中心部に散布	
みやこわすれ	開花促進草丈伸長促進	ジベレリン50～100 ppm	１株当り10～15㎖	１月中旬の保温開始時から７～10日間隔	３回	葉面散布	３回以内
きく		ジベレリン25～100 ppm	50～100ℓ/10ａ	生育期	２回以内	茎葉散布	２回以内
しらん		ジベレリン50 ppm	―	植付時	１回	30分間株浸漬	１回
チューリップ（促成栽培）	開花促進	ジベレリン400 ppm	１球当り１㎖	草丈７～20 ㎝の時に７日間隔	２回以内	筒状の葉の中心部に滴下	２回以内
	花丈伸長促進及び茎の肥大促進	ジベレリン100 ppm		草丈７～10 ㎝時	１回	ホルクロルフェニュロン0.05～0.1 ppm液に加用葉筒内に滴下	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
てっぽうゆり（促成栽培）	休眠打破	ジベレリン1000 ppm	―	低温処理前	1回	30秒間球根浸漬	1回
カラー（湿地栽培を除く）	生育促進	ジベレリン50 ppm	―	植付時		球根浸漬	2回以内
			50～150 ℓ/10 a	花茎伸長期		茎葉散布	
アイリス		ジベレリン50～100 ppm	―	植付時		球根浸漬	1回
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン250～500 ppm	30～40 ℓ/10 a	出荷予定期の2～3カ月前		茎葉散布	
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン50～100 ppm		生育期間中にロゼット化した時			
ソリダゴ		ジベレリン25 ppm	1株当り1 mℓ	活着直後又は萌芽期			
りんどう	発芽促進	ジベレリン50～200 ppm	―	は種前		種子浸漬	2回以内（種子への処理は1回以内、は種後は1回以内）
	生育促進	ジベレリン100 ppm	50～150 ℓ/10 a	定植直前または定植1～5週間後		茎葉散布	
			1株当り5～10 mℓ	収穫後		切株散布	
花き類（りんどうを除く）	発芽促進	ジベレリン50～200 ppm	―	は種前		種子浸漬	1回
アザレア	開花促進	ジベレリン250～500 ppm	30～40 ℓ/10 a	開花予定日の約1カ月前		茎葉散布	
さつき（施設栽培苗）	茎の伸長促進花芽分化の抑制	ジベレリン100～200 ppm	50～100 ℓ/10 a	茎の伸長初期～伸長終期（開花盛期以降）1～2週間間隔	3回	頂芽に十分散布	3回以内
さくら（切り枝促成栽培）	休眠打破による生育促進	ジベレリン25～50 ppm	50～200 ℓ/10 a	休眠期	1回	切り枝全面散布	1回
			―			切り枝浸漬	

⚠使用上の注意事項

★色掛けは2024年7月24日適用拡大

［1］　薬液の調製法及び取扱い上の注意

●本剤は次表に従って所定量の水に希釈すれば希望濃度の水溶液を作ることが出来る。

1ビン40 mℓ（ジベレリン200 mg含有）当り水量

ジベレリン濃度(ppm)	1 ppm	5 ppm	10 ppm	25 ppm	50 ppm	100 ppm	200 ppm	400 ppm	500 ppm	1000 ppm
［薬液＋水］の総量(ℓ)	200 ℓ	40 ℓ	20 ℓ	8 ℓ	4 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.5 ℓ	0.4 ℓ	0.2 ℓ

1ビン100㎖（ジベレリン500㎎含有）当り水量

ジベレリン濃度(ppm)	1ppm	5ppm	10ppm	25ppm	50ppm	100ppm	200ppm	400ppm	500ppm	1000ppm
[薬液＋水]の総量(ℓ)	500ℓ	100ℓ	50ℓ	20ℓ	10ℓ	5ℓ	2.5ℓ	1.25ℓ	1ℓ	0.5ℓ

●使用に当ってはその都度溶解調製することが望ましい。溶解後放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調製当日に使い切る。

●ボルドー液等アルカリの強い薬剤との混用はさける。

●本剤の使用に当っては使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

[2] 使用上の注意

●ぶどう

ぶどうには場合によってはサビ果の発生等、果実に障害が起こることがあるので、使用しない。

●かんきつ

〈落果防止〉

○本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用する。

○果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。

○低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。

○散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。

○ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用するときは、マシン油乳剤60～80倍液に加用する。

○マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●温州みかん

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用するときは、マシン油乳剤60～80倍液または展着剤に加用する。

○マシン油乳剤または展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤または展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

〈浮皮軽減〉

○本剤処理により、着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5ppm

・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3ppm

○本剤処理により薬斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

○異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がらないことがある。

○通常幼果１果当り小型噴霧器で 0.1～0.2 mℓ程度を噴霧する。

●長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●かき

○散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、十分注意する。

○本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

○散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行う。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

「富有、早秋、太秋、新秋、甘秋」

○「中谷早生」では着色遅延のおそれがあるため、25 ppm 以下の濃度で使用すること。

●すもも（貴陽）

○授粉を行ってから、散布する。

○薬液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。

○第１回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。

○本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

●みつば（軟化栽培を除く）

○散布する場合、葉の表裏に十分付着させる。

○高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

●みつば（軟化栽培）

○灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。

○散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

●セルリー

定植後約１ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。

なお、スポット散布で使用する場合は１株当たりの使用液量が５～10 mℓが適量である。

●ふき

収穫間近に散布すると効果が減少することがあるので、使用時期を誤らない。

●畑わさび

○花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。

○全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず２回処理する。気温が５℃以下では効果が劣るので 11 月上旬からビニール等で被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。

●たらのき

○散布は散布むらがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行う。

○薬液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。

●春うど

芽及び根株が十分したたる程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

●トマト

トマトの落果防止剤を使用した後散布すると効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、混用して使用する。

●いちご

〈着果数増加・熟期促進〉

○処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

○本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決める。又、第１回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。

○過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。

〈果柄の伸長促進〉

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

●ごぼう

○厳寒期は被覆資材等を利用して防寒に留意する。

○第１回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。

●ばれいしょ

○種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。

○浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。

○薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくと発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。

○種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。

○薬剤処理した種いもは食料又は飼料には使用しない。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

●花き

○処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。

○処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。

○チューリップ

〈開花促進〉

・本剤のチューリップへの利用は促成栽培（促成栽培、半促成栽培）に使用する。

・処理時期は草丈が７～20 ㎝（適期：10～15 ㎝）の頃である。

・ジベレリン溶液は筒状の葉の中心部に１回又は２回（７日おき）滴下する。滴下量が多くなると薬液があふれ通常は溜まる量が過剰分に引きづられて流出し、効果が不安定になるので注意する。1.0 ㎖の滴下であふれる場合は、保持される最大量に止める。

・滴下前に灌水をすませ、筒状の葉の中の水はあらかじめ取り除いておく。滴下後は２～３日灌水をひかえる。

・品種により感受性の差異が見られるので感受性の強い品種（ウィリアムピッド、ゴールデンハーベスト等）を選んで使用するのが有利である。

〈花丈伸長促進及び茎の肥大促進〉

・本適用は促成栽培を対象とし、花丈伸長及び茎の肥大を促し「切花」の品質向上を目的とする。

・微量では鋭敏に作用し、過量の場合、花弁の奇形や肥厚の生育異常、葉や花の着色不良若しくは色抜けの生理障害等の薬害が発生しやすいので、使用時期、使用濃度及び使用方法を厳守し、滴下処理に際しては、液が葉筒内より漏出しないよう注意する。

薬害回避には草丈７～８㎝とやや早い時期の低濃度処理をこころがける。

・本適用の効果には品種間差異があるので、促成栽培品種であっても事前に最寄り指導機関の指導を受け、効果及び薬害の有無を確認した上で使用する。

○てっぽうゆり

・球根の低温処理は８～13℃７週間とするが、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、７週間が経過していなくとも出庫する。

・本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少等の障害を受けやすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。

- 球根は 100 g 以上の大球を用いる。
- 定植時よしずや寒冷紗の被覆等によって温度を下げるような管理をする。
- 生育初期に２～３回尿素等の葉面散布剤の散布を行う。

・従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理によっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤等の利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。

○りんどう

・処理は葉が十分濡れる程度に散布する。

・使用時期の定植直前は苗姿３～４対葉期を目安にする。

・切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。

○ソリダゴ

・高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～３月頃）に処理する。

・処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。

○さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。

○さくら（切り枝促成栽培）

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

［3］　適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

⚠安全使用上の注意

●本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。
眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。
使用後は洗眼する。

●使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。

●浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。

●浸漬後の薬液は、河川等に流さず、水産動植物に影響を与えないよう適切に処理する。

●危険物第四類アルコール類に属するので火気に十分注意する。

●火気をさけ、直射日光が当たらない低温な場所に密栓して保管する。